



平素は、弊社商品にお取り組み頂き、まことに、ありがとうございます。月間通信 3月号をお送り致しました。何卒、よろしくお願い致します。

『 We are all alone 』

昨日は一日中雨だった。

ゆっくりした時を過ごしたせい、今朝は 4 時に目が覚めた。冬の星座だと思っていたオリオンの三ツ星が秋の宵には出ていた。だけど、この季節になると明けの同じ位置に出ていた。と思ったけれど違う星だった。

私たちはこの世界の現実に棲んでいる。先月書いた山尾三省の詩集に『ころ貧しきは幸いな』と出ていた。思う真逆で理解できなかった。豊かなところが幸いに導くと思っていたから。だけどそのところが自分を苦しめる存在だということも知っていた。『思え、もっと思え、これじゃ駄目だと思って、もっと思え』とは、ナモの言葉だった。私は『これでいいと思わなきゃ、生きてられないよ』と言った。ナモはしばらくの沈黙ののち『それは、これじゃ駄目だと思ふ先のことだよ』と言った。

30 年ほど前、私の育った家は『南無阿弥陀仏』

だが、『南無妙法蓮華経』と、父と母の先祖をお呼びして、唱える行を 21 日間、その時の友の勧めでスポーツ感覚でしたことがある。何と驚くなかれ、21 日目の今日で修行の明けという日、本当に先祖が沢山出て来て、唱えている私の後ろで、どんちゃん騒ぎの宴会を始めた。毎日唱える経の途中に『ころは猿猴の如くして、暫くも留まることあることなし』というセリフが出て来ると、いつも笑ってしまった。その通りだという気持ち半分と、サルに失礼だろうという気持ち半分だが、本当にころは厄介な存在だ。先祖の名誉のために書いておくと、私が、顔つきが変わるほど苦しい思いに沈んだ時、実家に行き仏壇の鈴を打ち、手を合わせると、先祖が代わるがわるやって来て『お前は正しい、そのまま頑張ってやれ』と励ましてくれたこともある。いつも自分で自分を『お前なら出来る』と、励まして来たが、先祖が実際に出て来たのは、この二度だけだ。

最近、脳と心の架け橋に『感性』というものがあるとの思いにいる。ころは外から遣って来て、また外に出て行く存在だと理解できたが、では脳とは何だろう。この脳の働きが活発であれば、身勝手なエゴで真摯に働く若者を虚ろにすることを防げたのではないかと、すごく残念に、申し訳なくおもう。

表の画像は、Firenze の有名な『ベッキオ橋』を望むアルノ川の橋ふたつ下手で撮った。古い街だった。古いといっても、どれくらい古いのかは分からない。少なくとも京都よりは古そうで、そうすると飛鳥の時代あたりに街としての呈を為すのかも知れない。いつの頃だったか、そう遠くない最近、丁度私が小豆島に来た頃、夜、暇にあかせて Web を見ている『Renaissance っていうたい何だったのか』と思い、いろいろ調べていた。

その少し前にローマとナポリは、故あって行ったことがあると、先の号で書いたことがあった。取り立てて記憶は無く、ただホテルのブティックで、香水を Perfume と言おうとしたのに、口からは Opium と出て来て恥ずかしかった。同行の 3 人の日本人と、店の日本人 1 人は気がつかなかったが、別な店員の若いローマっ子は理解して、『クスツ』と笑っていた。それだけ日本は健全で、ローマは退廃していたのかも知れない。

で、何が書きたかったのかは、フィレンツェでルネサンス時代を支えたのはメディチ家だと分かり、そのメディチ家に興味をそそられ、調べていた。『Medici』と書くが、勘のいいひとは Medicine を思い浮かべただろうと思う。飛鳥時代には、薬はすごく貴重品だった。むかしロート製薬さんと取り組みが始まった頃、そもそも薬屋とは何なのかと調べた。日本の名立たる製薬メーカーは殆どが奈良の宇陀地域の出身だった。どうということかと考えると、それは和人がいったん世界に散らばり、再びこの列島に、いろんな技術集団を伴って戻って来た時、薬に長じたグループが宇陀に棲みついたという事だろうと想像した。薬というと単に風邪薬や胃腸薬を思い浮かべるかも知れないが、そうではない。そういう意味では『酒』に似ているかも。

酒の人体に与える影響はタダならぬものがあるが、薬だってそうだ。しかも人間だけではない。生きとし生けるものすべてに於いて、影響する。いわゆる化学反応というやつだ。毒にも薬にもなるというが、染め物ひとつとっても、定着剤が必要になる。余談だが、いま『薬屋のひとりごと』というアニメが面白い。つまり化けるといふ事には希少が伴い、そこに富が集まる。

私が住む地域も『今城』という地域で、近くに『土室』なる地名がある。継体天皇の綺麗な前方後円墳を為す御陵もある。だから陶工という技術集団が集まっていた。単に土を捏ねて器を作っても、それは人々の心情を豊かにすることは出来るが、そこまでに富が集まることは無い。おそらく、このメディチ家はその薬で富を為し、その富で金融業を営み莫大な資産を形成したのだろう。

日本の薬屋さんに社会貢献の思想がどれだけ残っているのかは定かではないが、そもそも人が思想という事に注目した時、それが社会貢献に集約されていく事は、遺伝子が生物を豊かに向上させる宿命を帯びている限り、必然だったのではないかと。薬が化けるなら金融はもっと化ける。その富の行方が Renaissance に向かっても不思議はない。現在の富の行方が強烈な支配に向かう前、ローマによる宗教支配と、資本による金融支配の狭間に咲いた本物の花だったのかも知れない。

そもそも平等とは思わないし、曖昧な愛が大きく占めるとも思っていない。思っているのは、いずれもその目的が正しく、楽しめる皆の暮らしでなければ、遺伝子は進化しないと考えていて、その様に望まぬ遺伝子は摂理を知らず早晩消えていく筋にあるように思える。

私たちを支えるエネルギーが何処から来るのか。『瞬き三千年』という言葉聞く。この惑星を取り巻く銀河から来るとすると、こんな言葉も信憑性を帯びて来る。もし、生命がそんなエネルギーの塊なら、それは肯定的な哲学にのみ理を許されるのではないかと。

真っ直ぐに頭から地表に芽を出す向こう見ずな植物もいるが、南瓜のように先ず胴から地表に現れ、謂わば他に大変え難い頭より、例え胴の一部を傷めようとも、閾値に頼れば何とかなるので、胴が地表の環境を探り、それから頭を出して来るものもある。

この指示は何処から出ているのか。すべて南瓜自身が自覚の元になっている哀しいまでの性である。